
やる気ゼロの勇者物語

素人駄作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やる気ゼロの勇者物語

【Zマーク】

Z6189Z

【作者名】

素人駄作者

【あらすじ】

魔王と地の文の心の底からのシャウトにより魔王討伐の旅に出た勇者。

しかし、彼には魔王を倒す気も世界を救う気も全くなし！

そんなやる気ゼロの勇者のお話。

第0話 プロローグ（前書き）

みなさんはじめまして。

全くの素人で文才のない馬鹿野郎がいきなり連載小説とか・・・。
それでは、はじまり～はじまり～

第0話 プロローグ

プロローグ

世界は闇に包まれていた。

今から一年前、この地に魔王が君臨した。

魔王は大勢の魔族を引き連れ、世界の中心ともいえる王国を我が物とした。

周りの国も飲み込まれ、瞬く間に魔王の国はその領土を広めていった。

それにより、世界は魔王の国を中心としていた。

魔族は我が物面で道を歩き、人々はどんどん肩身の狭い思いをしていくこととなつた。

もうこの地に人々が安息して暮らしていける地などなくなつていた。しかし、闇に包まれた世界に光の希望ともいえる有る言ひ伝えが広まつていつた。

【黒いマントを風になびかせ、見たことのない剣を腰にさし、闇に染まりきつたこの世界を渡り歩き、その闇を浄化する者がいる】

人々はその者を　　勇者と呼ぶ。

「マジでだるい、もうだるすぎて死んじゃうよ～　てか、いつそのこと死んで楽になりて～　マジ魔王討伐とかだるいんですけど～　何がだるいって・・・例えんのもだり～よ」と、黒いマントを風になびかせ、見たこともない剣を腰にさした少年が先ほどから愚痴りまくっている。

・・・・

魔王を倒す気ゼロの勇者は今日も愚痴りながら、旅を続けている。

第0話 プロローグ（後書き）

すみません。

なんだこれ？って感じですね。

これで全力なんです。

これはひどい

評判があまりにも悪かつたら辞めたいと思います。

では

さよなら～

よかつたら、また見てください。

第一話 始まらない物語（前書き）

プロローグ見てちょっとでも興味を持ったか見てください。たぬさん
こんにちば。

え？別に興味を持つたとかじゃなく、ただ冷やかしに来た？
全然がまいません！

冷やかしだらうと、あらしだらうと、来てくれたならそれだけで感
謝です。

それでは
はじまり～はじまり～

第一話 始まらない物語

とある王国にあるお城の中

「今や魔王軍に支配されていない国は数少ない、わが国もいつ攻められるかわからん。今このこの国の軍力では、到底魔王軍には敵わない、だから攻められてからでは何もかもが遅いのじや。いち早く魔王を倒さねばならないのじや。どこかの国が、どこかの英雄がなどの、他力本願では魔王は倒せん。お願ひできるね。我が国最強の騎士、ゼロ君。君になら。」と、先ほどから神妙な顔つきで語っているこの老人は、この国の国王である。

そして、国王の話に何一つ動じず黙つて話を聞いている少年。彼の名は、ゼロ・ペンドラゴン。彼は、若干十七歳にして王国最強の騎士といわれており、彼の戦う様には一部の無駄もなく、まるで舞台劇を見ているようだと言われている。

この国は幸いにも魔王軍の本拠地には遠く離れた場所に位置する為、これまでに魔王軍に攻められることはなかつた。しかし、国王の言う通りいつ攻められてもおかしくない状態なのだ。

そこで国王は、王国最強の騎士率いる魔王討伐隊を結成しようと思つたのだ。彼程の強い騎士が率いる軍隊であれば必ずや魔王を討取つてくれるそう願い、今こつして彼に国王が直々にお願いをしているのである。

彼はうつむいていた。

無理もないだろ?。いくら最強と呼ばれていても彼はまだ十七歳の少年だ。相手はあの魔王だ。たつたの半日で王国を潰した者だ。そんな相手と戦つて来いと言われ。はい、わかりましたと即答する者などいるわけがない。

「わかつておる。私がどれほど酷いことを言つていいかは、君はまだ若いのだ、魔王軍に挑むなど人生を無駄にする行為に近い。」

国王は優しい人間なのだろう、本当にひりひりに言つた。「それでも、この国に魔王を倒すことのできる可能性があるのは君しかいないのだ。お願ひだ。」国王は頭を下げた。身分や名誉や地位、そんなくだらないものは全て捨てただただ、頭を下げた。

場に沈黙が訪れる。

彼はまだうつむいている。

国王が頭を下げることに驚いたのか、少し彼は動いたが。しゃべりだそうとはしなかった。

沈黙が訪れて五分

彼はまだうつむいている。

無理もないだろう。魔王に挑むか否かをそんなどぐる返答出来るはずがない。

沈黙が訪れて十分は経つただろうか、彼はまだうつむいている。

沈黙が訪れて三十分・・・。

沈黙が訪れて一時間・・・。

沈黙が訪れて「いや！もーいいから！どんだけ悩んでんのーさつきから何回沈黙が訪れて、使うのー行数稼ぎもいいとこだよー確かに悩むのはわかるよ。けど早く選択してもらわないと先に進まないから。てか、さっきから私と地の文だけで君一切しゃべってないよ！小説なんだから何もしゃべんないといないと一緒にだから。マジで！」なかなかしゃべりださない彼にしびれを切らし突っ込みまくる国王、つてかなにお前も地の文とか小説とか言ってんの？マジそうゆうのやめてくれません？今までめっちゃシリアルだつたのにいきなりコメディーじゃん。この小説は異世界冒険ファンタジー小説だよ。面白コメディー小説じゃねーんだよ。わかつた？次、世界観壊す様な事言つたらマジボコすかんな！リアル校舎裏だかんな！覚えたけよ？

・・・。

さて、さつきから悩みまくつている彼はどうとう口を開いた。

「・・・。」

口を開いた！

「・・・」

え？絶対遵守のはずの地の文無視？
おーい。

「・・・」

返事がない。ただの屍のようだ。

「・・・」

突つ込みすらなし？

「・・・」

おい！しゃべれよ！マジで！ホントしゃべって下さいよ。お前主役
じゃん！主役がしゃべんない斬新な小説なんか俺書けないよ？

「・・・」

何でしゃべんないの？しゃべれない設定なんかにしたあほえないよ？

「スースー」

スースー？まさか！

主人公は人の話を全く聞かず寝ていた。

・・・。

やる気ゼロの勇者の旅はまだ始まらない。

第一話 始まらない物語（後書き）

だらだら続く駄文を読んでくださってありがとうございます。

第一話なのに主人公しゃべつたの「・・・」と「スースー」だけですね。つてか、はたしてあれはしゃべつたというのか疑問ですけど・・・。

次回にはたぶんしゃべります。

それでは

わよなー

第一話 却下ー（繪書也）

はじまつ～はじめまつ～

第一話 却下!

とある王国にあるお城の中

今この場には、一人の老人と一人の少年以外誰もいない。

老人の方はこの王国の国王。

少年の方はこの王国最強の騎士。

なぜ一人が話しているか、それはこの地に君臨する魔王をどうか討伐してくれないだろ？ と国王が直々に彼に頼んでいるからである。

ギャグパートかシリアルパートかと問われれば、間違いなくシリアルパートの状況だらう。

だが・・・。

少年は居眠りをしていた。器用にも立った状態で。

「・・・。」

国王は優しい人間だ。民の為を第一に考え、民の為になることをしようとする。

決して私利私欲のために自らの力をふるわない。

しかし。

さすがにキレた。

「何寝てんの！？」れでも私一国の王だよ！ その王の前で居眠り！？ 今までめちゃくちゃシリアルパートなのに、いつきにだらけたよ！！」と、国王は思いのたけをシャウトした。

「・・・。」

「え？ まだ寝てんの？ あんだけ大声でシャウトしたのに？ もーこれ居眠りのレベルじゃないよ、熟睡だよ。なに国王の前で熟睡してんの？」

「・・・。」

「え？ まだ起きないの？ そろそろ私もマジギレだよ？ ぶん殴るよ

?あと三秒で起きたなきやマジ殴るよ?」「

卷之三

「マジ殴るかんな~本気だかんな~はい、いへへへかー。やばいよやばいよ。死のカウントダウンが始まっちゃつたよ~」

卷之三

はい、
いい

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

2

「」

のこが、何うせんだよ。死ね

「は、はい！すみません。」

「わかれればいいんだよ。わか

「いや、勢いに負けて謝っちゃたけど、君が寝てたのが悪

ね？なにその態度上

確かに国王の言う通りである。明らかに彼が悪いにもかかわらず、

彼はまた、たゞ反省をしていない。それと「N」が逆切れである。何

コレニ^ミに主人公[?]

セナカと瞬時に並んで、何の用か

仕事に手がけられない生徒を日本へ送る

בְּרִית מָשֶׁה וְעֵדוֹת

「中」其之二 戰勝の繪 一
「中」其之三 戰勝の繪 二
「中」其之四 戰勝の繪 三
「中」其之五 戰勝の繪 四

「却下」

「即答！？」

まさに即答だつた。国王が言葉を言いきつて即行だつた。

「そんな、もう少し考えよつよ。断るにしてもひとつ聞く

ナムカニシハレキテヨリ、國に於てサキニトニ置ケル。

「いや、だかへんじへんじやん。アリ二郎」

あまりにもひどい理由だった。

恐怖とかそういうのではなく、ただめんどいから。だから彼は断つたのだ。

第一何で俺なわけ？

「君はこの国最強の騎士じやう一が、君が選ばれるのは妥当だろ。」

「何の設定?」
「うのマジだるい。」

彼は王国最強の騎士として有名だが、王国一騎士らしくない騎士としても有名なのだ。

彼の強さは本物だ。彼一人で一国に匹敵すといわれるほどだ。しかし、それは彼が本気を出した時に限る。彼は基本的本気を出そうとしない。いや、それ以前に戦おうとするしないのだ。国王も断られんじやねーかくらいは思っていた。が、まさか即答されるとは思わなかつし、しかも断る理由がめんどくさいとは・・・。

「さう、わざと待つてくれ！」

それでもここで帰られるわけにはいかない。魔王を倒すには彼の力は必要不可欠なのだ。

にはいかない。

「お願ひいやゼロ君、すでに魔王軍の支配力は世界一だ。どの王国ももう魔王軍と戦うことは諦めかけている。だからこの王国をさらには世界を救うには君の力が必要なんじや。頼む！どうか私たち人間を救ってはくれぬか！？」

国王は地にひれ伏した。もう彼しかこの国が魔王軍に対抗出来なのだ。彼が最後の頼みなのだ。国王の必死の頼み。それを彼は・・・
「嫌です。」
・・・断つた。

•
•
•
○

せの口の脣がまたさなかつた。

第一話 却下！（後書き）

この小説ジャンル冒険なのになかなか冒険が始まらせんね・・・。
いやでもいいんじゃない？

冒険物語がなかなか冒険しないっていつのも斬新で！

・・・なのか？

というわけで

では

さやなら～

第三回 ハラクハルハラハラハラハラハラハラハラハラハラハラハラハラ

今日は勇者がかなりしゃべります。

はじめ～はじめ～

第三話 ドラクヒトヒガラニサヒコロコロ。あ、あとクロ

とある王國にあるお城の中

国王が土下座をしている姿といつの想像できますか？できない？頑張つて想像して下さい。

だつて現に今してんだから。

もしあなたがその国の騎士で、国王に土下座までしてクエストを依頼されたらどうしますか？

え？引き受けん？でも実際にされた騎士は断りました。

そんな奴が主人公だと思えますか？

思えない？でもそいつが主人公です。

・・・・。

「いりつして物語は幕を閉じた。」

「勝手に終わらせるんじゃない！しかも始まつてすらない！」国王はシャウトした。

そりやそうだ。自分は国王だ。その国王が土下座までした。それなのにたつたの「嫌です。」の一言で断られたのだ。叫びたくなる。つてか、マジでなに勝手に終わらそうとしてんの？この小説ジャンル冒険だよ？まだ冒険してないからね。冒険小説ですとか言っておきながら、地の文と国王がだらだらしゃべってるだけだから。Hリア移動すらしてないから。

最初の書き出し第一話からずっと【 】とある王國にあるお城の中】だから。

【 ある森の中】とか【 魔王城の最深部】とか書いてー
んだよ！

何でずっと同じ��アにいんの？ねー、マジホントーいい加減冒険してくんない！？

と、地の文もシャウトした。

「つるせーな。一人して叫んでんじゃねーよ。わかったよ。そんなに言つなら行つてやるよ。バラモスだろ？がゾーマだろ？が、なんならラヴォスだつて倒してやるーか？」

「そ、それは本当か！？」

「あー、行つてやるよ。」

国王と地の文の心の叫びが通じたのか、あのやる気ゼロの騎士がやつと冒険をするといつてくれた。

さすがは主人公である。なんやかんだ言つてやつてくれるのだ。国王なんてあまりの嬉しさに、「いや、ラヴォスは魔王じゃねーよ！」と突っ込み忘れていた。

「じゃつ。ちよつくり行つてきますは。」

彼はそんなことを言つてこの場から立ち去つとした。

「いや、ちよつくりつてー何それ！？近所のコンビニに行くんじやないんだよ！？」

ラヴォスは突っ込み忘れたが、今の【ちよつくり】とこの言葉にはまだ言葉には引っかかったのか我に帰り突っ込み始めた。

「まさかとは思うが・・・」

国王は言葉を切つた。

そして彼を上から下とよく眺めてから言葉をつなげた。

「その格好で行くつもりではないよね？」

彼は国王に言われ疑問に満ちた顔つきになつた。

無理もないだろう。別に彼は奇抜な格好をしているわけではなく、いたつて普通の格好なのだ。

「何言つてんすか？当たり前じやないですか。この格好変ですか？」

「いや、変じやない。むしろ全然普通の格好だ。けどね・・・」

国王はまたも言葉を切つた。

彼は意味がわからなかつた。別に普通の格好だ。

上はワイヤーシャツにノースリのジャケット。下は黒いパンツだ。

「普通の格好じゃダメだよね？君、騎士だし。ここ城の中だよ。今まで突っ込まなかつたけど、騎士である君がその格好じゃダメだよね？ちゃんとフル装備しなきゃダメじゃん。私、国王だよ？失礼だよね？」

本当に普通の格好だつた。私服感丸出しだつた。しかもワイヤーシャツは第一ボタンまで開け、ジャケットは前を閉めずと言つたつを。重要な話があると事前に聞いていたのにもかかわらずだからね？彼は相手が魔王だらうとなんだらうと気にしない。

ある意味ホントに王国一最強の騎士だ。

「君、ホントに魔王倒す氣ある？他校に攻めに行くんじゃないんだよ？喧嘩じやないからね。」国王はあきれながら言つ。

「わかつてますよ。今、俺学ランじやないじゃないですか。」

「絶対わかつてないよね？なに？マジでその格好で行くつもりなの？装備なし？」

「問題ないでしょ？ビーフ世界征服とか企んでる厨二野郎でしょ？大したことありませんよ。第一、魔王とか今時そんなの名乗る奴とかドラクエくらいにしかいませんよ？所詮ドラクエなんで、老若男女誰でもやり込めるようになつてますし。基本、俺は魔王を倒しに行くのじゃなく、倒し終えて全キャラLV100にするくらいやり込みまくる方が好きですから。氣が付いたら全員勇者ですよ？ストーリーなんて買って三日持てばいい方ですよ。」

「何の話してんの？」

「ですからやつぱりストーリーを楽しむにはFFですね。あれはホント奥深いすもん。でもなんか最近のは映画みたいなんすよね。ムービーが長い長い。確かにあれはいいんですけど・・・なんて言つんですか？きれいすぎみたいな？水清ければ魚棲まずみたいな感じ？だから絵は鳥山明くらいがちょうどいいんですね。それ言うとクロノトリガーは良かつたすね。まさか魔王も仲間に出来る

が、衝撃でしたし。それに・・・

「うん、もういいから。もう君の好きなようにして。」

「じゃー好きにしますね。行つてきます。」

「ちょ、ちょっと

「なんすか？」

「なんすか？じゃないよ。君、武器持つてないじゃん。」「

「いらぬーだろ。」

「いやーさすがに武器はいるでしょー。どうやつて魔王倒すの？」

「喧嘩に武器を持ち込むなんて三下のすることです。」

「やっぱわかつてねーしーだから喧嘩じゃねーからー。ハアー。ホント君と話していると疲れるよ・・・。」と、誰が見ても疲れていることが分かるような疲労感いっぱいの顔をした。しかし、表情を変え国王は彼にあるものを授けた。

「何すかこれ？剣？にしては細いですね？刃も片方にしかないし・・・。」

「それは【刀】というものだ。」

「カタナ？聞いたことのない剣ですね。」

彼に授けられた剣それは刀だった。読者のみなさんはフツーにわかるかもしれません、この世界は剣と言つたら両刃の真っ直ぐなものがフツーなので知らないのも無理はない。

「そうじや。王国一番の鍛冶屋に作つてもらつたものだ。鉄をも切り裂き刀身に魔力を込めてあるため絶対に刃こぼれしないとう相当な業物だ。」

「じゃー相当高く売れますね。ありがとうございます」「

「なに売ろうとしてんのー?」

「これで旅費を何とかしろつて」とじゃないんすか？

「そんな回りくどいことはせん！旅費は別に出るから。それと、もう君以外の騎士は集まっているから。まずは騎士団長としていまくは？俺以全員集まってるってどういう意味ですか？」

「そうか。君、最初の方寝てて聞いてなかつたんじゃな。さすがに

君が王国最強の騎士といつても一人では無理だらう。だが」「何言つてんすか？」

「は？」

「魔王なんて俺一人で余裕ですよ？なめてんすか？」キレる騎士。
「な、何を言つてのだ！そんなの『』」「テメー馬鹿にすんなよ？俺
がちょっと本気さえ出せばバラモスだってゾーマだって余裕なんだ
よ！一回ゲームクリアしたらやるだろ。勇者一人旅。いつとくけど、
一人旅だとメッチャ経験値貰えるかんな。だから魔王城着くころに
はレベルが尋常じやないことになつてるかんな？ただ弱点としては
寝たりすると起こしてくれる奴がいなければフルボッコになるけど。

「彼は基本やる気は人一倍無いが、意地も人一倍だ。なめられたり、
負けたりとか、そう言つのが大つきらいなのだ。【吾輩の辞書には
敗北という字はないのだ。もしあつたらそんな辞書は燃やしてやる
さ。】といいくらいの負けず嫌いだ。

「何を言つてるんだ！？君は！君はまるで魔王の恐ろしさを知らん
か」「とにかく！」

「俺は一人で行くからな。勇者一人旅だ。そういうわけだから。今
度こそ行くぞ。」

そう言つて彼は国王の返事無しにドアを開け部屋から出て行つてしまつた。

・・・。

やる気ゼロの勇者の勇者一人旅がやつと幕を開けた。

第三話 ナラクヒトヒガラシヤシヨウコトノナ。あ、あとクロニ（後書き）

やつと冒険が始まりましたね。
最後の最後でやつと・・・。

それはさておき

この小説の主人公ゼロ君ですが、
三話目にしてやつと彼がどんな格好をしてるかわかるところ事態が
起きています。

大変よろしくないです。

最初の方で彼がどんな感じのキャラなのかという説明文がなく、今
さら彼がどんな奴なのか説明するっておかしくね？
とこうわざわざまな理由で彼の見た目が全然想像できない・・・。
とこうことで

【みてみん】とこうサイトに絵を貼りました！
しかし、ここで問題が発生した。

「俺、絵ヘタじゃん」○ノ

別にヘタでもいいよといつ心優しい人は見てみてくれれば感激です。

なんかダラダラとすみません。

そでは
わよつならへ

第四話 チート

森の中

森は荒れ果てていた。

木は枯れ大地は瘦せこけ生き物たちはほんとんどが死に絶えた。

魔王のせいである。

空気中には微弱ながら魔力が含まれている。

これを【マナ】というのだが、これは本当に微弱なもので全く害はない。

しかし、魔王がこの地に君臨してからというもの空気中のマナは増え続けている。これは、魔王が魔力を無意識化に放出しているためである。

魔王は息をすると同時に辺りに災厄をまき散らし、瞬きをするのと同じように生命を殺す。

空気中のマナの増加により世界は変わり始めた。

生き物は次々と死んでいき、空からはきれいに輝く太陽は消え、瞬く間に死が広がった。

そんな、絶望が支配する闇の世界を、その元凶である魔王を倒そうと旅に出た一人の勇者が森の中を歩いていた。

黒いマントを風になびかせ、見たこともない剣を腰にさした少年。

彼の名は・・・

ゼロ・ペンドラゴン

若干十七歳にして極東に位置する王国の最強の騎士といわれている。彼以外に勇者になれ「マジでだるい、もうだるすぎて死んじゃうよ

「てか、いつそのこと死んで楽になりて、マジ魔王討伐とかだるいんですけど、何がだるいって……例えんのもだりよ」りえる者は、腐るほどいそうだ。

「え？ 何？ ホント。こいつ自分が主人公だつて自覚ゼロ？ せつかく俺がカツコよく行こうと思つた矢先にこれかよ。マジいい加減にしてくれませんか？」

「つるせーな。ネチネチネチネチ。姑かテメーは？」

「普通に地の文に突つ込み入れてんの？」

「ダメ？」

「いいわけないよね？ これジャンル冒険だよ？」

「でも、キーワードのところにコメディーってあるわ」「そ、それは……。少しでもキーワードを多くすれば検索でヒットしやすくなつて、見てくれる人が増えるかなー、ってか増えてほしーなーと思つただけで、決してコメディー路線を指しているのではなく、基本は冒険者なの！」

「考えがあざといな」

「う、うるせー！」

悪かつたな！ どうせ今だ感想・評価が〇だよ！

まだ投稿して日が浅いからとか自分に言い聞かせて、なんとか泣きださないくらいまでに保つてる状態だよ！

あ、やべ。泣きた。

「こいつして物語は幕を閉じた。白髪野郎の次回作に期待！」

なに勝手に終わらせてんの！ ？

「いいじゃん。ほら文の一目見てみな【 】とある王国にあるお城の中【 】から

【 森の中】に変わったじゃん。エリア移動できたじゃん。夢が叶つたじゃん。

それでもうよくね？」

よくねー！！！ 確かに言つたよ。エリア移動したいつて。

けど、それが全てじゃないからーこの小説の最終目的魔王討伐だか

らー。ヒリア移動じゃないからー。

「もいいよ。魔王討伐とか、そつぱんだるいのはもつと正義感の強い勇者にでもやらしどけば。俺に正義感とかやる気とかを求められても困るんで。タイトルよく見ろよ。やる気ゼロの勇者って書いてあんだけ。ホント魔王討伐とか、だるきこと山の如しから。魔王とか、倒したら負けかなって思つてるんで。」

やる気ゼロぢうじやないよね、もうマイナスくらこまで行つたよね。やる気の炎零地点突破だよ。某主人公が必死の訓練で手に入れた技を標準装備だね。すごいや。あれ、氣のせいかな字がちょっと違つた。

「うるせいいな。魔王倒せばいいんだろ。わかつたよ。サックと倒してやるから、ぐちぐち言うな。」

サクッとしてねーそんなスナック菓子感覚で魔王倒せると思つてんの？

「俺を誰だと思つてんだ？ 言つたら？ バラモスだろ？ ピゾーマだろうと、俺に言わせてもらえばスライム同然だ。」

へへ。さすが。じやー後ろにいるティッケーくまみたいのもスライム同然だね。

「は？」

彼が振り返った先にはくまみたいのがいた。

だが、大きさが明らかにおかしい。パッと見ただけでも3メートルはありそうだ。

しかも、一匹ではない。数十匹はある。彼の周りはすでにくまくまくま。

「冗談きついぜ。最初に出てくるモンスターはスライムがお約束だろ。周り一帯くまだらけじゃねーか。」

もうこれは、リアルモンスターだ。スライムとかドラキーとかあんなかわいいもんじやない。旅をはじめていきなり中盤のボスみたいなやつ（大群）に出くわすとは、ついてませんね。これはリアルにゲームオーバーじゃない？

「なめんじやねーよ。せつきも言つたら・・・」

その時、一匹のくま（推定3メートル強）が勇者に襲いかかって來た。

そして・・・

・・・くまが真つ一いつになつた。

「・・・バラモスもゾーマも、馬鹿みたいにカイくまも俺ことつたらスライムと同じだ。」

数分後

先ほどと変わらず辺り一面はくまだらけだった。
が、先ほどとは違つ点が一ヵ所・・・。

全てのくまが死んでいる。

・・・。

やの氣、ゼロの勇者はチートなくらい強かつた。

第四話 チート（後書き）

彼かつたるいとかだることか言つてますが、
彼の旅はまだ・・・

数時間くらいしか経つません。

国王に言われちゃっちゃと支度して、

その日のうちに王宮出で、

数時間くらい森の中を歩いてたら・・・。

みたいなのが今回のお話です。

基本やる気ゼロなんで疲れる事とか嫌いなんですね。

彼は。

やつと冒険者ぼくなつてきましたね。

これからどんどん冒険物にしていきたいと思います。

それでは

そようなう

第五話 腹減つた！

森の中

たとえどれほど強い者であろうとも

その者が人である以上

絶対に逃れることのできない生命の危機がある。

それは・・・

「やべー 腹減つて死にそう・・・。」

飢えである。

彼はなんと朝、トースト一枚食べてから何も食べてな・・・。

別に大したことなくね？

飢えとか言って昼飯抜いただけじゃん。

あと、もうひとつ言わせてもらうとなんで食料とか持つてこなかつたの？

「だつて荷物とか重いじゃん。
クソー失敗したなー。」

魔術師とか格闘家とかはいらないけど、荷物持ちと料理人はパーティーに加えておくべきだった。」

いや、おかしいから。パーティに荷物持ちと料理人はおかしいから。第一、魔王討伐の旅が一日で終わると思ってんの？

まさか【魔王城】で最初に書くことで途中の旅をすっ飛ばして、いきなり魔王戦とか思つてたの？

「思つてた。」

思つてたんだ。思つてやがつたんだ。思つてやがつたな。クソ野郎。無理だから。

そんなこと無理だよ。

「なんでだ？」

フツーに考えてわかんない？最初に国王と地の文がだらだらしゃべ

つてたら、いつの間にやら魔王城でおかしいと思わない？超展開す
ぎじゃん。

「いいんじゃない。一つや一つそんな小説があつても。」

あつてもいいかも知んないけど、少なくとも俺はそんな小説書きた
くない。

「わがまま言うなよ。

てゆーかマジ腹減った。

お前、作者権限で俺の前においしそうなメシ出せ。

こう『突然勇者の前においしそうな』駆走の山々が現れた。』みた
いな文書いて。』

お前の方が明らかにわがまだよね。自分の空腹を満たすためにこ
の小説の世界観を潰そつとしてるよね。
おかしいから。

目の前にいきなり『駆走とか、どう頑張つても違和感 Maxだから。
「何とかしろよ。俺はもう腹の虫が鳴くどころじゃないんだよ。
もう断末魔の叫びだから。

さつきから腹の虫どもギヤーギヤー叫びまくってるから。
わかつたよ。しょうがないな。
じゃー・・・。

なんか牛みたいなモンスター登場させるから、そいつ倒して丸焼き
にでもして食べて。

言つとくけど今回だけだからな。勇者が腹すかすたびに牛みたいな
モンスター出てくるって言つのも不自然だから。
今回限りの特別だぞ。

勇者の前に突然牛のよつこ「ちょっと待て」
なに？

「丸焼きと言つても、俺は今火を起こせるよつなのねーよ。」
だつたら魔法とかで火起させばいいじゃん。

「は？何言つてんの？俺、魔法なんて使えねーよ。」
え？嘘？マジで？

「マジ」

「マジかよー

お前どうすんだよ。勇者だけが使える的な魔法出せないじゃん。

ふざけんなよ！俺がどれだけ考えたと思つてんの？

どんな感じにしよーかなー。とか

やっぱ名前はカツコイイ方がいいよなー。とか

めっちゃ考えたんだぞ。

「しらねーよ。いいからなんか食いもん出せ」

火起こせないんなら、牛の刺身でも食つてれば？ 拗ねてる。

「ふざけんなよ。

血抜きもしてねー肉を生で食つたら腹壊すにきまつてんだろー！ 刺身ならそうだな・・・。

あれだ！

なんかデカイイカみたなの出せ。俺、イカ好きだし。いや、イカ好きだしじゃねーよ。

ここ森の中だからね。

最初の行にも書いてあるじやん。

森にイカはおかしいから。

「つるせーなー

かたいこと言うなよ・・・ん？」と、突然歩きだすゼロ。え？どうしたの？

「今、かすかだが、何かおいしそうな匂いがした。

どこかに小屋かなんかがあつて、そこに住んでる奴が料理をしているんだ。

そうに違ひない。」

おいしそうな匂い？でも、ここ森の中だよ。そんなまさか。と五分ほど歩くと、確かに小屋が見えてきた。つてか、スゲー。マジだったよ。

でもどうすんの？

人は住んでるっぽいけどまさか突撃なんぞ「失礼しまーす。」

しちゃったよ。

突撃しちゃったよ。

しかも、ものすごいドアをガンガンガンたたいてるし。

やばいよ。

こんな山の中に住んでるような人だからたぶんスゲーマッチョなターザンみたいな奴だよ。

そんなドア叩くなよ。

絶対やばいから。

うるせー！とか言って斧持つて出でくるから。

ターザン斧持つて出でくるか」「はい。どちら様でしょうか？」

といつて出てきたのは

見た目中学生くらいのかわいい女の子だった。

・・・。

女の子！？

ターザンじゃなくて！？

そんなターザン改めかわいい女の子に彼が言い放った第一声は。

「うまそうな匂いに釣られてやって来た。腹が減ってるんだ。飯を食わせる。」

・・・。

やる気ゼロの勇者はまるで盗賊のようだ。

第五話 腹減った！（後書き）

第六話にして

やつと。やつと。

女の子が出てきました！

長かった。

実際に長かった。

これでこの小説にも少しほ萌えな感じが出るといいな
やっぱ重要ですよね。

萌えは！

とこうことで

次回よりいよいよ

【イヒーイ女の子だ～

あんな事そんな事

はたまたこんな事まで起きるかも？】編突入です。

されでは

をよひなら～

第六話 選択肢にあるものだけが正解とは限らない

森の中

辺り一面は暗くなり、森の中はさらなる闇にのまれる中

勇者は・・・

腹をすかせていた。

森の中というのにもかかわらずブーツ
旅だというのにもかかわらず手ぶら

昼飯抜き

モンスターとの戦い

地の文との口論

その他もろもろの事情で彼の腹の虫は鳴くレベルを超え、断末魔の
叫びだった。

そんなとき

突然、どこからともなくいい香りがしてきた。

その匂いをたどると、森の中だというのに小屋が見えてきた。

彼は、突撃隣の晩御飯作戦を決行。

中から出てきたのは・・・

小さな女の子だった。

年は中学生くらいだろう。

藍色のショートな髪とつぶらな瞳

その色を際立たせるような白い肌。

とてもかわいらしげな女の子だった。

そして

そんな女の子に彼が放った第一声は
「うまそつな匂いに釣られてやって来た。腹が減ってるんだ。飯を
食わせる。」だった。

「え？ えっと・・・。はい？」困惑の女。

そりやそうだ

いきなり飯を食わせるとか傍若無人以外言い表す言葉がない。
お前はどこにジヤイアンだ！と、突っ込んでやりたい。
頑張れのび太！いや、女の子だからのび子か？
ジヤイアンに負けるな！

「えっと・・・。」

言つてやれ！

テメーなんかにやるメシはねーよー！と
のび子は・・・じゃなくて女の子は・・・

「まだ出来上がってないので少し待つて貢えますか？」
ジヤイアンを迎えた。

・・・。

のび子お――――――――――――――――

だめだ！

ジヤイアンなんか追い返せ――――

「出来るまで中で待つていいだセコ」

だめえ――――――――――――――――

のび子だめ――――

そんな奴中に入れちゃ

なんでそんな奴中に入れんの――？

優しそうだから？

優しくない！

優しくないよーーーー

映画とかでたまにちょっといい」とするナビ

違うから！それ、違うから！！！

普段悪い奴かな。こどもいじめじたから

実祭は、むしやくしやするつてだけで殺つて來

入れちゃだま「問答無用でエリア移動」

森の中のとある小屋の中

傍若無人なジャイアンは人の家に突撃隣の晩御飯をし

「へへ、食へすきだ。なんか今なにか無産めやい

「セーハ、お口に鑑みあわせないか？」

「ああ。なかなかうまかつたぞ。ありがとな。

まあと

子供産めるまで食つてるからね

「それ二つあるが一本何番だ

のび子聞くの屋

それ最初に聞くべきことー！

「ご飯」駆走にする前に聞く「」と「」

「アーニー、おまえは？」俺が？せーた めんどくしか

と、勇者が自己紹介をしている途中ビームからともなく雄叫びが聞こえた。

「なんだ？ 今の？」

「たぶん今のはメガベアーの雄叫びです。しかも相当近かつたです。

さすがほしの森に住んでるだけあって詳しい。

「メガベアー? なにそれ?」

「」の森で一番凶暴なモンスターです。

最大では4メートルまでいるものもあるそうです。

デカいくま？それって！

あ
|

卷之三

「切つた？」

一
あ

なんか喧嘩売つて来たからな

金圓切つてやつた

「なにしてるんですか！？」

この時期のメガベアリは特に気性が荒いんですね

卷之三

「なんかす、」「うん」と(左)、「はー

たふんあなたが切ったメカヘアの血の匂いをたどりてきてるん

卷之三

私が何とかしますから」

そう語つて小屋から出て行く、のびk・・・女の子

女の子視点

家を出てから少し走ったところには、メガベアーの大群がいた。
たぶんあの人について仲間の匂いをたどって来たのだと思う。
どこを見渡しても　くま　くま　くま

中には4メートルはあるであろうものまでいる。

メガベアーは仲間意識が強く集団で群れをなす

そして一匹がやられれば集団で

集団がやられればもつと多くの集団で

といつよびに不良のよつな習性がある。

とても怖い

怖くて今にも逃げ出したい。

でもそんな事をすればあのゼロさんという人はこの群れに殺されてしまう。

助けなくちゃいけないんだ。

だって私は・・

魔法使いなんだから。

さてどうしたものか？

なんかよくわからんが

あの元カイぐまが争い合戦に来たみたいで
それであのちいかわが「私がほのか」まき

おいおいお前みたいになちつさいがキがどうにかできるわけねーだろ

したたたれーた

助けてやるかな

と思つて外に出てあの女を探してたら・・・

見失った

あのガキ

辺りも暗いから小屋に戻る道もわからぬいし

迷子？

井川

俺が迷子なんてありえないだろ

त्रिवेदी का ना?

めぐらし寝る

C めんどい寝る

D めんどい寝る

卷之三

アリババの運営組織

おいおい真後ろから聞こえたよ

俺、逆方向に走つて行つてたの？

無駄な体力、消費しちまつたなー
めんどいけど・・・

やつぱりEの搜索続行でファイナルアンサー

・・・。

やつの『口』の勇者は少しはやる『返』があった。

第六話 選択肢にあるものだけが正解とは限らない（後書き）

なんか女の子出てきたのはいいけど・・・
名前が出てきませんでしたね。

え？名前はのび子じゃないの？
違います。

断じて違います。

あと

一つ気になることがあるんですけど
この小説のお気に入り登録が2になつてるんですけど
逆お気に入りコーナー一覧が(0)になつてるんですよ。

これってどういうことなんですか？

あまりにも人気がなくてかわいそうだから運営様が情けでっにして
くれたんですか？

それとも俺が勘違いをしているだけですか？
そこん所を誰か教えてくれると嬉しいです。

つてかこれ見てる人いるのかな？

・・・（泣）

それでは
さよなら～

第七話 己の価値は自分でつけるものではなく他者につけてもらつもの

森の中 女の子 side

私の父は賢者、母も有名な魔法使いだった。

そんな二人の間の子だからか私は生まれつき魔力が高かった
その娘とあって、恥がないよう

毎日、毎日がむしやらに魔法の勉強をした。

私が十歳になる頃

事件が起きた。

私の魔力が父と母を超えてしまったのだ。

父と母は私をほめてはくれなかつた。

父と母は私を怖がつた。

しだいに私の住んでいた町の人々も私を怖がつた。
私は独りになつた。

ついに私は

父と母に

住んでいた村に

捨てられた。

私は捨てられた。

最初は意味がわからなかつた。

いきなり父に「お前なんていらない」と言われた。

母には「あなたなんて産むんじゃなかつた」と言われた。

村人には「恐ろしいからこっちに来るな」と言われた。

私はみんなに否定された。

私は思った

「私はいらない子なんだ」
私は私自身にも否定された。

私は村から出て

この森に住むことにした。

私の存在価値はコレ（魔法）しかない
危険な目に合うのは初めてじゃない

大丈夫

きっと勝てる

私は私の存在価値を賭けて・・・

戦う！！！

地の文 side

デカイくまが女の子に向かつて飛びかかつている

あんなデカイくまに圧し掛けられればこんな小さい女の子なんて潰されてしまう。

しかし

女の子は押し潰されなかつた。

くまは突然燃えあがり灰となつた。

おそらく彼女は魔法を使ったのだろうが
まったくそんなそぶりは見せなかつた。

魔法を使う際必要なのはいろいろあるが
その中で最も重要なとされるのが

【詠唱】だ

詠唱とは簡単に言つてしまえば
これからどんなものを使い、あることを起しますよ
といった宣言のようなものだ。
たとえば

今のようにくまを燃やす際は
『私は今から火を使います
火力は全てを灰に帰す程のものを
範囲はくま一匹』

とこうようにかなりめんどくさい宣言（下準備）をしたのちやつと
『くまが燃える』という現象を起こせるのだ。

しかし彼女はそれをしなかつたのだ。

つまりは

【無詠唱】

無詠唱などは大賢者と言われる世界に数えるほどしかいない者にのみ
使用できるものだ。

詠唱をするということは何万桁もある計算を筆算するのと同じで
めんどくさいが精度は高い。

逆に

無詠唱は暗算

めんどくさくはないが精度にかけるのだ。

魔法での計算ミスは魔力の暴発を意味する。

魔力が暴発すれば魔法は発動しないし最悪、死の危険性もある。
だから自らの力に相当な自信がなければやらない。

それを彼女は何のためらいもなく行つたのだ。

彼女は長さ十五センチ程の指揮棒のような杖をとりだし
それを右から左に流れるように動かす
すると辺りにいた多くのくま達が燃えあがり灰となる。

くまの大群はいなくになった。

ほんとんどが灰になり死体すら残つていない。

「ハアー・・・。何とかなつたみたいで『 G U A A A A A A A

A A A A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

その時いきなり背後からくまが襲つてきた。
女の子は突然のことに対処できなかつた。

生き物が最も油断する時

それは獲物を仕留めたときだ。

獲物が大きければ大きいほど

それを仕留めたときの安心感と達成感

それにより全くの無防備状態になるのだ。

彼女はまさにそれだつた。

危機的状況に陥り

それを乗り切つた安心感でいっぱいになり
油断していた。

無詠唱というのは言葉に発さないだけで
無意識に出来るというわけではない。

頭の中で計算式を組み立てているのだ

しかし、安心しきつっていた彼女は突然のことにつかが出来なかつた。
ただの体当たりだつたから致命傷にはならなかつたが
それでもあのデカイくまの体当たりだ

意識が朦朧とする

これではもう魔法なんか使えない
くまは止めを刺そうとしているのか
さらに襲いかかって来た
そして・・・

くまは真っ二つになつた。

「Eにしといて正解だつたみたいだな。」

女の子 side

意識がくらくらして集中できない

突然後ろからくまが襲いかかって來たが私は突然のことに対応が出来なかつた。

どうやら私はたつた一つの私の存在価値も守れないようです
ここで私は死ぬ

そう思つた時目の前に黒いマントが横切つた。

「Eにしといて正解だつたみたいだな。」

おい、大丈夫か？

一食の礼だ

助けてやる。」

そう言つて私に手を差し伸べてくるのは先ほどの男性だ
名前は確かゼロさん

助ける？わたしを？なぜ？

私なんかに助けられる価値なんてありませんよ

私は両親にも

村の人たちにも
自分こそら

否定されたんですよ？

そんな利を匪に

この人が危ない

「だ、だめです。危険です。私なんかほつといて逃げてください。」

「危なー? 馬鹿こすんなよ? 二んナーテカイだけが取リ柄のよつな奴

51

この俺が！この俺様が負けるわけねーだろ？ — GUAAAAG

A A A A A A A A A A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! !

! ! ! ! !

どこから湧いてきたのだろうか

またも辺りはぐもで埋め尽くされてしまつた。

この俺は數で勝とうとしてんならじんなんしゃたんれーそ
森の中の全員呼んで来い！

「Jの森のくまどもを絶滅してやつから。」

地の文 side

さすがはチート勇者である
マジでくま絶滅したんじゃね？

といつぐらしの死骸の山々

「強さだけはまさに勇者だ」この重要

あなたは本当に何者なんですか？」と

だいぶ回復したのか

少し怖がった様子で控えめに質問をしてくる。

「俺か？俺はな

バラモスだろーがゾーマだらうがなんでもかかつて来いの
最強無敵の勇者様だ」

どうやら彼にもいちおは勇者といつ自覚があるそりだ

「勇者様！？」

「そうだ。勇者様だ。クソめんどくせ が魔王討伐といつのを田指
し旅しているんだ。」

「た、旅ですか？ですが・・・勇者様は剣以外なにも持っていない
ようですが？」

よくぞ突っ込んでくれた！

「だつて重いじゃん荷物つて。」

「重いと言つても・・・。

それでは食事などはどうしていいるのですか？」

「どうするも何もな」

まだ旅して一日経つてないし

あれ？でもどうしよう？

これから俺？」

ここにきてやつと自分の愚かさに気づく馬鹿。

「うへん

いつたん戻るのもめんどいし

くそー！やつぱ荷物持ちと料理人はパーティに入れておくべきだ
つた。

どこかにサンジみたいに料理のうまいやつね・・・。」

「な、なんでじょつか。ゆ、ゆ、勇者様！私の顔なんかをじつと見
た」「お前だ！」

「え？」

「お前の料理はうまかった。」

「そ、そんなことは・・・。／＼／＼

「そこで！お前の腕を見込んで俺のパーティーに料理人として入れる！」

「え？ええ―――？わ、私なんかをですか？」

「そんな私なんかが勇者様のパーティーに入れてもらえるなん？」

「だまれ！」

「お前に拒否権はない！」

俺はお前の料理の味が気に入った

だからお前は自分に自信を持つて俺のパーティーに入れ

さすがはジャイアン

傍若無人ぶりでは彼の右に出る者はいないだろう。

「それとお前の名はなんだ？」

「は、はい！ペスイ・ミステイクです。」

「ペスイだな。

おいペスイ！お前に初仕事をやる

「は、は、はうい！」　囁んだ

「今戦いで疲れて腹後減ったから何か作れ」

断れ！断るんだ！！のび子お――――――！

彼女は一瞬困った顔をしたが笑顔で返事をした。

「少々時間がかかりますがよろしいですか？」

・・・。

やる気ゼロの勇者のパーティーに料理人（魔法使い）が仲間に入つた。

第七話 凶の価値は自分でつけるものではなく他者につけてもらひ物（後編）

やつと女の子の名前がわかりましたね。

名前の由来は英単語『pessimistic』 悲観的な『から
うまい具合に名前になるように切つただけです。
適當すぎですみません。

言い訳を！言い訳を言わせて下さい！

日本人ならまだしも

外人ですよ！

私に外人キャラにちやんとした名前を付けるスキルなんて持ち合わ
せていないんですよ！

すみません。

そしてペスイちゃんですが例の如く

私の残念な文才のせいで想像しにくでしょう。
そこで！

またも絵にしてみましたー

「みてみん」様に投稿するので
よろしかった見てみてください。

それでは

さよなら～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189n/>

やる気ゼロの勇者物語

2010年10月31日01時13分発行